

若き義勇隊員
たちの満州

幻の 松花部隊

高橋健男

Takahashi Takeo

電子書籍の操作について

- ・ 目次をクリックすると、該当ページまで移動します。
また、移動先ページの見出しをクリックすると、目次に戻ります。
- ・ 「十字キー」やマウスのホイールを使用して読み進めます。
- ・ 「フルスクリーンモード」に設定すると、読みやすくなります。

「フルスクリーンモード」設定方法

メニューバー「表示」→「フルスクリーンモード」

Escキーで元の表示に戻ります。

※パソコン環境により、「フルスクリーンモード」が使用できない場合があります。

幻の 松花部隊

若き義勇隊員
たちの満州

高橋健男

Takahashi Takeo

はじめに

「昭和二二年か二三年に自分たちの部隊のことが新聞に載った」と、八〇歳をすでに超えている松花部隊しょうかぶたいのある元隊員が語った。記事の見出しは「北满蓮江口れんじやんこうに消えた大槻中隊」、自分が所属した中隊のことだったという。「新聞一ページにある程度のスペースが割かれていたと思う」「毎日新聞しかとっていないから、毎日新聞だ」——ここまでの記憶はあるのだが、何年何月何日の新聞だったかまでは思い出せない。

元隊員が引揚げ帰郷したという昭和二十一年八月一四日から、記憶違いがあるかもしれないので念のために、その後一、二年間の毎日新聞を繰っていく。当時の毎日新聞は一日二ないし四ページの分量ではあるが、目当ての記事を探しながらすべてに目を通すには数日かかる。記事は「雪の消えた頃の新聞に掲載」と、その老人は言う。雪深い新潟県中魚沼郡津南町つなんまちに住むその老人が言う「雪の消えた頃」とは、五月中旬以降を指している。五月の新聞を丁寧に見ていくが、残念ながらその特集記事は発見できなかった。代わりに昭和二二年六月二三日付新聞に次の記事を見つけた。

「松花部隊」大槻中隊は昭和二〇年八月一四日、蓮江口で全滅。第三、第四大隊は八

バロフスク地区、第一、第二大隊はクラスノヤルスク、ウズベリ地区収容の様様。

毎日新聞が戦後初めて「旧陸軍北方部隊の消息」と題して、多くの部隊の戦後動向をまとめて掲載した。老人の記憶が「新聞一ページにある程度のスペースが割かれていた」とあったように、この北方部隊消息は新聞一ページの全段が使われている。松花部隊に関するこの記事は一覧の末尾に「その他の部隊」として記されていた数行である。この数行の中に「蓮江口で全滅」という文言を確認できることから、これが老人の記憶にある記事かも知れないが、本当のところは解明できなかった。いずれにせよこの記事が発見できたことにより、戦後長らく「まぼろし」と伝えられてきていた「松花部隊」という部隊名が、戦後の早い時期から軍記録としてあることが確認できた。

ほかの軍記録をいろいろ物色してみる。昭和二六、二七年頃、当時の外務省アジア局第五課あるいは引揚調査課によって作成された「満洲省別概況」なる文書がある。何回にも分けて各県に送付されたらしい。新潟県庁福祉保健部福祉保健課援護恩給室の書庫にそのすべてが保管されている。その中の「三江省概況」に次の文章を見出す。

佳木斯を中心とする三江省民の本格的引揚は八月一二日からで、一〇日にはいまだ引揚方針が決定せず、僅かに千振疎開（四千名を予定）を軍及び省命令で実施したた

けであった。斯くの如く寸刻を争う非常事態において、引揚の進捗を妨げたのは、軍の無方針と日系上層官吏の軋轢対立であった。手島朋義省次長は師団司令部に加担し、渡辺三郎副市長は特務機関に組した。しかし、軍司令官、機関長河西太郎中佐は共に一日には依蘭に後退し、後事は藤原景大尉に託された。

この文章中に「松花部隊」という名称は出てこないが、佳木斯ジャムスの後事を託されたのが藤原景大尉であったとする。この藤原景大尉こそが、幻の松花部隊の部隊長である。文章からは、軍司令部、特務機関などが依蘭いらんに転進した後、佳木斯市内のもろもろの「後事を託された」のが藤原大尉であったことが分かる。では「後事」とは何か、「藤原大尉一人に」ということなのか、具体的なことはこの記録からは何も分からない。

一九八九（平成元）年九月二日、NHKスペシャルが「忘れられた女たち―中国残留婦人の昭和」を放映した。長野県送出の第八次大八浪泰阜村開拓団タイパランヤサオカワの入植家族で、団の看護婦であった中島多鶴（終戦時二〇歳）を伴って残留婦人を訪れたドキュメンタリーである。そして番組の中では、泰阜村開拓団史『満州泰阜分村』（一九七九年）に採録されている中島多鶴手記の「八月一二日、関東軍の歩兵部隊二〇〇人と合流」という記述、ならびにその後の日本兵との行動に関して、「なぜ終戦後のこの時期に関東軍の部隊がこのあたりにいたのか、今となっては不明である」とコメントしている。

「関東軍の歩兵部隊」との遭遇は開拓団避難民に大きな安心感を与え、また、困難な山中の逃避行や渡河などですいふんと助けられたのであった。しかし、ドキュメンタリー編成時点でNHK取材班はその歩兵部隊のことを解明できていず、まぼろしの存在として松花部隊（＝関東軍の歩兵部隊）のことを語っていた。もちろん「松花部隊」という名称は番組にも番組を書籍化した同名書にも出てきていない。

二〇一〇（平成二二）年八月二〇日、テレビ朝日はスーパーモーニングの時空スペシャルは、「戦地で散った幼き命―松花部隊」と題する一時間番組を放映した。番組は藤原景大尉が残した手書き手記原本、現在は二男の重雄氏が所蔵する松花部隊長の手記の紹介とその内容を追った。そして本書にも登場願った元松花部隊員である田邊良三・高野久男両氏からは具体的場面での証言が加えられた。各場面を説明するに田邊良三作の色鉛筆画が有効に使用された。

田邊良三・高野久男両氏は、テレビ朝日の番組からちょうど二年前、二〇〇八（平成二〇）年八月三〇日、旧満州を調査記録する会が東京都調布市の共催を受けて開催した「満州の終焉史と松花部隊の活躍」シンポジウムにお二人を招いて以来、筆者は個人的に何回となく資料提供や体験談をお聞かせ願ってきていた方々である。テレビ番組での両氏の証言は本書内容と同じだが、番組ディレクター解説の最後の一言が気になった。「松花部隊記録は現在厚生労働省に残る軍略歴のみです」とあった。このときはすでに本書執筆中

盤を過ぎていた。番組終了後、私は手元の入手資料を改めて眺めた。それがまだ世に出ていない埋もれた貴重な松花部隊資料であることを実感した。本書では「まぼろし」とされてきている松花部隊に関するそれらの資料のすべてを収録し、ここに公開したい。

新聞記事を覚えていた元青年義勇隊員は、松花部隊大槻中隊の元隊員であった。一九四五（昭和二〇）年八月一日、佳木斯の松花江対岸（しゅうかこう）の町である蓮江口においてソ連軍との交戦を体験していた。毎日新聞の記事はその大槻中隊が「全滅」と伝えているが、その元所属部隊員に筆者は会っている。そして後日、ほかにも数人の松花部隊大槻中隊の元隊員と会うことになる。「全滅した」とされる部隊の生き残り隊員が何人もいたのである。

松花部隊の存在を確認できたが、「全滅」といわれる大槻中隊の元隊員と話していることは奇妙だ。記事が掲載された昭和二二年の六月時点ではまだ、旧満州にあった関東軍各部隊の消息が完全に明らかになっていなかったことは十分考えられる。しかしその後、「松花部隊」という部隊名を満州開拓団関係の文献や手記に見出すことはまれである。どんな部隊であったのかは不詳である。松花部隊の実態こそが「まぼろし」と言える。

松花部隊は一九四五（昭和二〇）年八月一日、旧三江省（さんこう）の省都・佳木斯において特務機関下に編成された。八月末から九月初めにかけて武装解除されているから、実働一月に

満たないにわか編成の部隊である。部隊員は約三〇〇〇名、九月末から一〇月初めにはすべてシベリアに抑留された。

この短命部隊である松花部隊の詳細は戦後世に知られることはほとんどなかった。本書は軍関係記録や関係者手記の発掘、元隊員生存者ならびに松花部隊に遭遇し行動を共にした元開拓団員、それぞれの人たちは「松花部隊」という名称をほとんど聞いていなかったのだが、それら関係者からの聞き取りなどによってその実態、つまり部隊の編成と活躍、敗走、一般邦人や開拓団避難民との関係、武装解除からシベリア抑留までの全貌を明らかにしようとするものである。

松花部隊には佳木斯在住邦人や近隣開拓団からの応召者が組み込まれた。その中に追分おいわけにあつた新潟県送出第五次豊穰ほうじょう義勇隊開拓団員がいた。彼らは一九四二（昭和一七）年六月末に渡満し、昭和二〇年初めから六月までに現地訓練所であつた追分訓練所からその近接地で義勇隊開拓団に移行した。本書では松花部隊の全貌を明らかにするに、その中心にこの豊穰義勇隊開拓団員らの青年たちを置く。その意味で本書は、一七歳前後の「若き義勇隊員たちの満州」の物語でもある。

幻の松花部隊

若き義勇隊員たちの満州

目次

第一章 一九四五年八月九日、佳木斯……………17

1 満州国旧三江省と省都・佳木斯 18

2 そのとき佳木斯在住日本人は………20

(1) 佳木斯医科大学 20 / (2) 佳木斯市公官吏家族 24 / (3) 一般邦人 29 /

(4) 佳木斯小学校 32 / (5) 佳木斯中学校 36 / (6) 佳木斯赤十字病院 39

3 そのとき佳木斯駐屯軍各施設では………43

(1) 師団司令部・兵舎 43 / (2) 軍官舎家族 46 /

(3) 佳木斯陸軍第一病院看護婦 49

第二章 ソ連軍の満州侵攻と松花部隊の編成……………59

1 佳木斯正面、国境の日本軍と邦人 60

(1) ソ連軍の侵攻、佳木斯正面 60 / (2) 国境守備隊と近隣邦人 62 /

(3) 関東軍第二三四師団、佳木斯から方正へ 66

2 松花部隊の編成経緯 73

(1) 旅団・師団の改編と松花部隊の誕生 73 / (2) 牡丹江・豊浦部隊編入予定の応召兵たち 76 / (3) 松花部隊の編成とその任務 82

3 松花部隊編成の具体 87

(1) 松花部隊の本部・大隊編成 87 / (2) 松花部隊編入の在郷軍人らの出身母体 93 / (3) 急遽臨時編成ゆえの「まぼろし」の部分 101 / (4) 佳木斯中学生も編入? 103 / (5) 「二七将校」の乱造 108

第三章 松花部隊の活躍と動向 ……………

1 松花部隊各大隊の行動概要 114

(1) 佳木斯より方正、綏化へ 114 / (2) 本部・第一大隊ならびに第四、第五、第八大隊 116 / (3) 第二、第三、第六大隊 122 / (4) 第七大隊 123

2 松花部隊と黒龍部隊 128

(1) 関東軍情報部特務機関 128 / (2) 黒龍部隊とは 130

3 松花江対岸、蓮江口での戦闘 134

- (1) 八月一四日、ソ連軍蓮江口まで進攻 134 /
- (2) 北満蓮江口に消えた大槻中隊 141 / (3) 敗走、運命の分かれ 145
- 4 松花江沿いの南下、土城子での戦闘 148
- 5 特警六〇三大隊中村中隊 156

第四章 松花部隊と応召義勇隊員 …………… 159

- 1 青年義勇隊、義勇隊開拓団 160
- 2 新潟県送出第五次豊穰義勇隊開拓団 165
 - (1) 第五次追分笹井中隊 165 / (2) 満鉄追分訓練所での生活 168 /
 - (3) わずかばかりの義勇隊開拓団在籍 171
- 3 林口より先に進めず 174
- 4 三日三晩寝ずの任務遂行と避難 179
 - (1) 炎と黒煙に包まれる佳木斯市街 179 / (2) 綏化への移動と蓮江口・湯原での下車 181
- 5 「先生お先にさようなら」 185

(1) 追分駅で 185 / (2) 「最後の訓練生」たち 187 / (3) 寮母・徳江マサ活躍の姿 190

第五章 佳木斯在住邦人・近隣開拓団の避難 1 綏化へ…………… 195

1 三江省在住邦人の避難状況 196

(1) 「満洲省別概況」の概況 196 / (2) 佳木斯在住邦人の避難 204 /

(3) 兵と一般邦人 210

2 第一次弥栄開拓団 215

(1) 最初の満州開拓団 215 / (2) 綏化への避難 216

3 第二次千振開拓団 222

(1) 佳木斯在住邦人の疎開先 222 / (2) 千振―佳木斯間行ったり来たりの脱出行 225

4 佳木斯北方鶴崗からの避難 228

(1) 鶴崗から佳木斯、千振を経て綏化へ 228 /

(2) 佳木斯に南下できず徒歩で福隆へ―新潟県送出第一二次津南郷開拓団 232 /

(3) 「南叉の悲劇」と命がけの逃避行 236

第六章 佳木斯在住邦人・近隣開拓団の避難 2 方正へ……………243

- 1 長野県送出公心集読書村開拓団 244
- 2 長野県送出大八浪泰卓村開拓団 254
- 3 埼玉県送出小八浪中川村開拓団 263
- 4 方正での越冬と犠牲 272
- 5 方正日本人公墓 281

第七章 松花部隊ら日本兵と開拓団避難民の遭遇……………285

- 1 兵と避難民との遭遇 286
 - (1) 安堵とさらなる苦難と 286
 - (2) 行軍兵士の実状 293
- 2 苦難の老爺嶺越え 295
- 3 太平鎮付近での満軍・暴徒襲撃 303
- 4 捨てられた子供たちと松花部隊隊員 307
- 5 “忍者部隊”の兵士たちと迷子 311

6 避難民に遭遇した兵士たちの思い 318

(1) 佳木斯挺進大隊の兵士たち 318 / (2) 避難・行軍を共にした兵士たち 321

第八章 松花部隊の終焉…………… 327

1 方正・綏化での武装解除 328

(1) 方正にて 328 / (2) 綏化にて 333 / (3) “自主的”な武装解除 337

2 シベリア抑留をのがれた松花部隊員 338

3 豊穰義勇隊開拓団員・家族らは 348

4 若き義勇隊員を偲んで 351

(1) 山形市立石寺 351 / (2) 七四体の花嫁人形 356 / (3) 慰霊と慰霊碑 360

おわりに 364

引用・参考文献 371

第一章 一九四五年八月九日、佳木斯

1 満州国旧三江省と省都・佳木斯

広島に続いて長崎にも原爆が投下された一九四五（昭和二〇）年八月九日を境として、当時満州に居住していた日本人は苦難の底に陥れられる。その苦難は在滿一般邦人、軍人・軍属、満州開拓団、青少年義勇軍それぞれにもたらされたが、とりわけ悲惨な状況に陥れられたのは都市部から遠く離れた、あるいはソ満国境付近に入植していた開拓団員・家族であった。

旧三江省は東西三〇〇キロ、南北一〇〇〜二〇〇キロにわたる広大な地域で、北面と東面を旧ソ連と接する。北の国境は黒龍江（＝アムール河）、東は烏蘇里（＝ウスリー河）が兩國を隔てる。大部分が湿地帯で辺境部の人口は少なく、交通網が不良のところも多々あった。内陸部東部は南北に完達嶺山脈、西部は小興安嶺の山並みが続き、南方にも老爺嶺が続く。三江省全体はこれら山脈と河川に囲まれ、一種独立した地の様相を呈していた。この地勢は「三江省をして軍事的生命線たらしめるとともに満州国の穀倉地帯としての重責を担わした」（「満洲省別概況」という）。

佳木斯は当時の三江省の省都で、満州東北地方の政治・経済・軍事の中枢をなしていた。交通の要所であり、ハルビンから流れ下って黒龍江に注ぐ松花江（＝スンガリー河）は大



春の松花江の氷塊と佳木斯市街遠望

きな船が行き交い、人員・物資の輸送拠点であった。鉄道は南方内陸へ林口、牡丹江を経て図們に至る図佳線が延び、西方内陸へはまっすぐ綏化までの綏佳線が走る。佳木斯市街地から松花江を渡って北には炭鉱の町・興山（＝鶴崗）までの軍事鉄道が延びていた。佳木斯は三江省政府の所在地となつて以来大きく膨張した街で、一九四一（昭和一六）年当時の人口は六万人、そのうち約六〇〇〇人が日本人で、ロシア人も約三〇〇人住んでいた。終戦時の佳木斯在住邦人の数は約二万人といわれる。

一九三七（昭和一二）年に図佳線が開通したのを契機に未開の宝庫・東満州の開発を目指す満州国は、満州人・朝鮮人をはじめ日本人開拓農民の進出を望んだが、その変貌ぶりは驚異的であった。それもその

ず、鉄道開通以前はハルビンから松花江を船で下り、さらに佳木斯から一日、二日を馬車にゆられて、奥地の小さな町へと進出していたからである。

佳木斯を中心とした広大な地域は日本の満州開拓濫觴らんしやうの地である。「三江平原」と呼ばれていたこの地域には武装移民であった第一次弥栄村いやすか、第二次千振村ちふりをはじめとして多くの開拓団、開拓民が送り込まれていた。満蒙開拓青少年義勇軍の現地訓練所もあちこちに設置されていた。三年間の現地訓練を終了した青年たちは義勇隊開拓団に移行して奥地の国境近辺に入植していた。

それぞれの人たちがそれぞれの地で昭和二〇年八月九日を迎えたわけだが、その後の行動で交通の要所であった佳木斯でさまざまな状況が起こった。八月九日以降の数日間に佳木斯を経由して避難行動に移った人たちは八万人とも一〇万人とも伝えられる。

2 そのとき佳木斯在住日本人は……

(1) 佳木斯医科大学生

「八月九日午前〇時四一分、異様な爆音が耳に響いた」——当時佳木斯医科大学ジャムス（昭和一

五年六月、満州での医師不足を補う目的で開学)の四年生であった医大第三期生の池田精孝(東京都調布市)は、当日から始まる修了時期をずらした卒業試験に備えて机に向かっていた。夜のしじまを突き破るかのような飛行機の爆音を試験勉強中に耳にした。池田青年は瞬間的に時計を見た。だからそれが「〇時四一分」であったことをまざまざと記憶する。それまでの日常生活では耳にしたことのない「異様な爆音」だったので、とっさに時刻を確かめる行動をとったのだった。池田青年がソ連軍の満州侵攻を知ったのは夜が明けた後であった。

当時、関東軍の飛行機が佳木斯市街地の上空を飛ぶことはめつたになかった。米軍爆撃機B 29は一九四四(昭和一九)年夏以来、内地(日本本土)はもちろんのこと、南満州の鞍山製鋼所や大連、奉天(現・瀋陽)、新京(現・長春)などの都市部への爆撃を行っていた。爆音はB 29のものとも思われるが、大地を圧するかのような、そして腹にも響くあのB 29の爆音とはどうも違う。米軍にはB 29以外に北満州にまでやってくるような航続距離の長い飛行機は当時なかった。

ソ連軍の佳木斯第一撃は、大方の記録・記憶では午前〇時三〇分である。その第一撃とは、佳木斯の師団司令部と佳木斯忠霊塔の中間地点付近への爆弾投下であった。佳木斯医科大学の学生寮は興亜寮と言ったが、このとき寮内にいた医大二年生の塚田義彦は、昭和二〇年八月九日未明のことを次のように記す(塚田義彦『朔風の地に生きて』、二〇〇三年三

ブーン、ブーン、おや、飛行機が飛んでいるのかな？ それにしても、日本軍の航空隊は夜飛ぶのかな？ これまで夜間に飛んだことはほとんどなかったが、変だなと思いつながら、また夢路を辿ろうとしていた。そのとき突然ドカーン、ズシューンと一
大音響が聞こえてきて、同時に寮の壁土がバラバラ落ちてきた。

飛行機の爆撃音を聞いた後の寮内は、それまで静寂そのものだったのがこの一事をもつて一変した。寝具を蹴^けって飛び起きる者、「空襲！ 空襲！」と叫ぶ者、外に出る者、大声でしゃべる者、座ったままにいる者などなど、騒然となった。しばらくの騒ぎとなったが、不寝番からの「司令部その他に問い合わせたるも不明」の連絡に、消灯・就寝となったという。

夜が明けるとソ連軍の満州各都市への空襲の報せが次々と入る。学生たちは早朝から交代で警戒に当たる。医学系学生として召集延期となっていた彼らにも入隊の命令が下るかもしれない。

上級生の一部は軍医中尉であった教授の引率のもと、先遣隊として牡丹江^{ぼたんかう}の陸軍病院に
向けて出発した。その他、徴兵検査を終了していた者全員にも「牡丹江第五部隊に入隊」

の命令が出る。牡丹江は満州の東部、ソ満国境の近くである。入隊即国境の最前線行きは間違いない、戦死覚悟の出発だった。約九時間の夜行列車で翌一〇日早朝、牡丹江駅に着。しかし、陸軍病院はもぬけの殻、「すぐ関東軍司令部へ」の指示を受け、新京に向かう。

池田精孝らは召集されたものの病院長が、「この戦争は負けだ。君たちは若い、死ぬことはない。早く安全な場所に転進しなさい」と指示。病院長自身は戦場に向かい戦死したが、池田精孝は「病院長の計らいで何とか生き延びることができた」と述懐する。しかし池田精孝の家族は終戦を迎えても日本に帰れず、満州で無念の死を遂げた。祖父と弟妹を伴った両親は一九三九（昭和一四）年二月、長野県下伊那郡出身者で編成された第八次大古洞開拓団員として旧三江省通河県に入植していた。大古洞開拓団の記録では死亡・未帰還者数が在団者数の半数以上に上っている。

病院長の指示を受けた医学生たちは避難民で鈴なりの列車で新京に送られた。列車が駅を離れると、乗り遅れた人たちが延々と長蛇の列をなして歩いているのを目にした。それはその人たちにとって果てしなき広野の「死の行軍」の始まりであった。一方、列車は八月一六日、新京着。同一八日、大学関係者は新京の軍人会館別館に集結、同二四日に佳木斯医科大学は大学解散式を挙行している。

新京に出た佳木斯医科大学生は、難民で死の町と化したかつての首都で医師として避難

途中省略

続きは製品版にてお読みください。

著者プロフィール

高橋 健男 (たかはし たけお)

1946 (昭和21) 年、新潟県生まれ。

新潟大学教育学部卒 (1968年)。上越教育大学大学院修了 (1986年)。県内小中学校長を歴任し、2006 (平成18) 年3月定年退職。新潟県在住。厚生労働省社会・援護局援護企画課中国孤児等対策室長依嘱「身元未判明中国残留孤児肉親調査」調査員、「方正友好交流の会」会員。

著書に『満州開拓民悲史一碑が、土塊が、語りかける』(批評社、2008)、『満洲建設勤労奉仕隊點描記』(新潟日報事業社、2008)、『赤い夕陽の満州にて-「昭和」への旅』(文芸社、2009)、『新潟県満州開拓史』(文化、2010) などがある。

幻の松花部隊 若き義勇隊員たちの満州

2011年 12月15日 電子版発行

著者 高橋 健男

発行者 瓜谷 網延

発行所 株式会社 文芸社

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-10-1

電話 03-5369-3060 (編集)

03-5369-2299 (販売)

<http://www.boon-gate.com>

© Takeo Takahashi 2011 Coded in Japan

ISBN978-4-286-11022-6

(紙の書籍をお求めの場合には、お近くの書店にてお尋ねいただくか、文芸社ホームページ

<http://www.bungeisha.co.jp> をご参照ください。)